

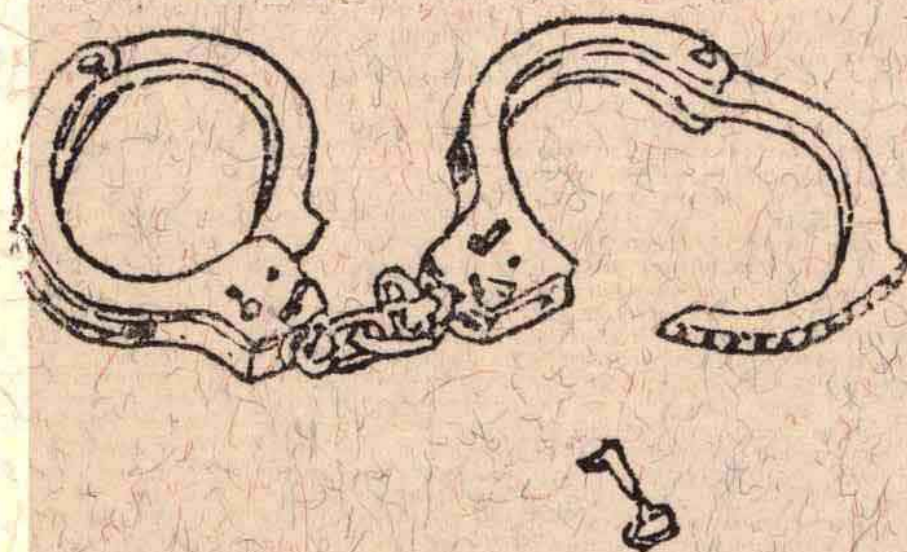
判 決

八 橋 卓 編

判決

NET テレビ連続放送

八橋卓編



圭文館版

決 判

昭和三十九年二月十日 印刷
昭和三十九年二月十五日 発行

定価 三〇〇円

編 者 八 橋 卓

発行者 佐々木義雄

発行所 有限会社 圭文館

東京都港区芝田村町二ノ一八
電話東京五九一局五七三六番
振替東京一〇八一一番

乱丁・落丁の際は直ちにおとりかえいたします

まえがき

NETテレビ チーフディレクター 八橋 卓
課長

昭和三十七年十月からNETテレビで毎週放送され、好評を受けておりますテレビドラマ「判決」の中から今回五つの作品を小説化することになりました。

いままで放送して参りました数多くの作品はどれ一つとつても忘れ難い愛着のあるものばかりなので、その中から五つだけを選ぶというそのことが先ず大変でした。

その上毎週の放送をアナをあげずに台本を書いていただくということが、これ又至難の業であるところへもつてきて、小説まで書く暇があるだろうか、これ又頭痛の種でしたが、幸い作家諸氏の快諾を得ることが出来、もつともこれは内緒話ですが、「小説を書かすならば台本の方は遅れることを覚悟しての上でだな……」等という脅し？ もなきにしもあらずでしたが……

まあ放送にアナもあかず、このような本が出来上がり、これまで、判決を御覧になった方も、そうでない方も、これから一層この番組に親しみを持っていたくことが出来れば望外の幸せと思います。

なお、御執筆下さいました作者、その作品の主な出演俳優を御紹介致しておきます。

レギュラーの弁護士役として活躍しております、尾上松緑、佐分利信、仲谷昇、河内桃子、南風洋子、沢本忠雄の諸氏は省かせていただきます。

木枯し抜けて

高橋 玄洋 作

出演 高橋昌也、渡辺文雄、藤田進、舟橋元

発 芽

本田 英郎 作

出演 加藤嘉、島かおり、莫井きん、堀越節子

真実の価値

生田 直親 作

出演 小夜福子、阪口美奈子、高田稔、佐々木功

引き裂かれて

深 沢 一夫 作

出演 岸田今日子、杉浦直樹、筑紫あけみ

五百円の命

大 垣 肇 作

出演 川津裕介、松本典子、織本順吉

目次

木枯し抜けて	五
発芽	三
真実の価値	二三
ひき裂かれて	一六
五百円の命	三三

判

決

木枯し抜けて

1

法廷からの帰り岡崎隆則は東京高等検察庁へ入つて行つた。高等検察庁は地裁と最高裁の間にあり、彼の所属する東京弁護士会からは目と鼻の先だが平静仲々立ち寄ることもない建物である。というのは、岡崎たち弁護士にとつては法廷で鎬を削つて相争う敵の牙城だからである。しかし、今日の岡崎には敵の本陣に乗り込んでゆく気概はない。むしろ、例の右足をひきずつて歩く癖を一そう露骨に現わしながら、その歩度は敷石の上に沈みがちである。

彼が扉を開けて入つていつたのは部長検事室と書かれた部屋であつた。受付の女の子は立ち上がつてにこやかに迎える。

「居る？」

彼は衝立ての向こうを顎でしゃくつた。

「ハイ、いらつしやいます」

名前も聞かず即座に答えたのは、あながち弁護士バツヂのせいばかりではない。関部長と彼の関係を知っているからだ。

「ああ居た居た」

「よう、……珍らしいナ」

机に向かつて書類に目を通していた関部長はパチリと音をたてて眼鏡をあげるとそのひさしの下から上目使いに立つて来た。

「何だい、今日は？」

用が無ければ来ないと決めてかかつてるいい方だ。

「西本の細君が亡くなつた」

「あの未亡人が……」

関検事の顔が一瞬くもつた。西本というのは、彼らと同期生の判事である——いや判事であつた男である。

「西本が死んで何年になる？」

「十年だそうだ」

「十年か……早いもんだなア」

そういえば西本が死んだのはメーデー事件の直後だった。あれからもう十年たっている。十年の歳月が二人の頭を白く染めている。働きざかりだった三人が一人は死に、二人は老境と呼ばれても仕方がない処へ押しやられている。そんな感慨が二人の頭の中をかすめて通った。

女の子が紅茶を運んで来る。その角砂糖をつまんで関検事がいった。

「いいのかい砂糖？」

「砂糖？ ……お前駄目なのか？」

「いや、少しならいいんだ」

「無理するなよ」

お互いに糖尿のけがあるのだ。

「お互いに歳はとりたくないもんだな」

「ああ、とりたくないもんだ」

関検事が一口飲んでいった。

「十年なんて直ぐだな」

「いやに十年にこだわるじゃないか」

岡崎の何げない冗談に、関検事のひさしの下、眼が光った。あきらかに検事の目だ。岡崎は長年法廷で検事とわたりあつて来た勘で、

「ははあ、こ奴何か、十年〃に關係のある事件をかかえ込んでるな」と睨んだ。同じ釜のめしを喰い、同じ教室で学び、一緒に屋台に首をつつ込んだ親友でも、一とたび法廷に立つと検事と弁護士として激論をたたかわさなければならぬのが、司法研修所の同期生という間柄である。が、一つたん仕事を離れば三十年の友情に変わりはなかった。岡崎は関に西本の細君の葬儀一切の日程を知らせ、友人総代を頼むと、

「じゃ同期の連中には俺から通知を出しとく。遺児の今後の問題もあるし相談にのつて貰いたいんだ」

と立ち上がった。

そこへ入つて来たのは若い検事、成島である。

「お珍らしいですね、岡崎先生」

「よう」

「やつてますか岸本？」

「ああ、やつてるよ」

そういえば彼の事務所の岸本昇とこの成島も研修所の同期生の筈である。

「近いうちに法廷で一戦交えたいといつてたと伝えて下さい」

「ああ判つた。……君、これ口つけてないよ」

テーブルに置かれたままの紅茶をさしていった。

「済みません」

「なに、飲みたくても砂糖を入れて了つたんで飲めないのさ」

関がまぜかえした。

「違う違う、……じゃ、又連絡する」

岡崎は怖いものから逃げ出すようにいうと、もう扉の外へ姿を消していた。

「ハハハ、忙がしい奴だ」

「お元気そうですね、岡崎先生」

「なに、見かけほどじゃなさそうだ」

「処で、これなんですが……」

持つて来た書類をさし出す成島の態度は、もう上司に対するそれに代つてゐる。鋭い眼と眉間の深いしわが精悍な青年検察官を物語つて氣持がいい。関検事は例の眼鏡をパチリとおろして部長デスクへ戻りながら成島の持つて来た書類に目を通した。

「この前の特別手配では何の情報も入らんのかね」

「ハイ、二三ありましたがみな人違いでした。……この強盗致傷の田所謙吉なんか、あと五日で時効です」

「あと五日か、時効の十年なんて直ぐだな」

「全く残念です。犯人は今頃何処かで指折り数えてほくそえんでるでしょう」

関検事が先ほどから十年にこだわつていたのもこの問題をかかえていたからだつた。

「田所謙吉、この男だね」

「ハイ」

そこには写真と共にこう書き込まれていた。

「強盗致傷共犯、田所謙吉、当時十九才——現在二十九才、身長一米六〇糎位い、特徴左耳前の傷跡、背中に火傷の跡あり、指紋渦状紋、公訴の時効成立昭和三十八年二月十五日」

「全国の警察に手配してあるんですから喧嘩一つしても挙つて来ると思ふんですが……」

「他に前科はないんだな」

「ありません。しかし現場から田所に間違いない指紋が出てますから紹介さえあれば、直ぐに挙る筈なんです」

「この強盗致傷というのは？」

十年前、千葉市内の時計商が短刀で突きさされ、現金七万円と時計十個（時価八万円）が盗まれた事件などそれは翌日の新聞紙上にかなり大きく取り上げられたものの、当事者以外最早や覚えていた読者も恐らくいまい。主犯大寺良平（当時22才）の逮捕によつて、一応社会的には終止符をうたれたようにみえた。しかし、御存知の読者は、大寺逮捕の報の最後に、共犯田所謙吉は船橋市内で大寺と別れたまま、未だにその行方は判らない、という二行半の記事を思い起こして頂きたい。今問題になっているのはその男のことなのだ。

「君、それほどの奴だ、今まで他の事件でも挙つて来ないというのは、死んどるのかも判らんぞ」

「それなら未だ許せますが……」

強盗をした男を時効になるまで逃げ延びさせたとなると、第一検察の信威にかかわる、それに社会正義からいつても、見ず知らずの家に押し入り、金を奪つただけではなく、主人を傷つけた

男が、何のとがめも受けないで、うのうと生きているのは犯罪を助長するようなものだ。成島にはそれが許せないのである。

「しかし、どうやって探し出す？　せまいようでも日本は広いよ。しかもあと五日で罪そのものが消えていくんだ」

成島はくやしそうに手配書に目を落した。

2

大田垣巡查は、本置から廻つて来た手配書を見てハツとした。自分でも青ざめてゆくのが判る。

「まさか?! そんなことあるもんか、そんなことつてあつてたまるもんか」

それは最早や声になつて狭い駐在所に流れていた。彼はあわてて手配書を伏せ、周囲を見渡した。誰一人いる筈はない。ここは彼一人の駐在所なのだ。赤い外灯のホヤの向こうに遠く国境の山々の白雪が冬の澄み切った空氣にいやに近く見えていた。

「……違う違う、絶対に違う」

彼は自分自身に言いきかせた。そして、もう一度恐る恐る手配書を開いてみる。いやでもそこ